

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 23 日現在

機関番号：23702

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22592499

研究課題名(和文)多胎家庭への地域ネットワークを基盤とした当事者主体の包括的な育児支援方法の開発

研究課題名(英文)Development of a comprehensive childcare support method centered on parents based on community networks for families with multiple-birth children

研究代表者

服部 律子(hattori, ritsuko)

岐阜県立看護大学・看護学部・教授

研究者番号：70273505

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：当事者主体の多胎育児支援を目指して育児支援の方法について取り組んできた。多胎家庭の特徴として、妊娠期から様々なリスクにさらされており情報の不足もあって妊婦は心身ともに不安定な状況にある。また多胎児を迎える家族も同様に育児の方法はもとより母親をどのように支えて良いかわからない状況にある。本研究において、多胎家庭への調査をもとに、妊娠期から乳児期にかけての育児ニーズを明らかにし、支援の内容と時期を明確にした。また支援の方法として当事者によるピアサポートを実施しその有効性を明らかにした。当事者主体の多胎支援の方法については、地域での専門職とのネットワークを基盤とした組織的な方法を開発した。

研究成果の概要(英文)：We have investigated methods of childcare support with the aim of realizing childcare support for multiple-birth children centered on the parents.

Regarding the characteristics of families with multiple-birth children, women with multiple pregnancies are exposed to various risks from pregnancy, which, combined with a lack of information, causes them to experience both mental and physical instability. Similarly, the families of the children are unsure about how to provide support for the mother, in addition to childcare methods. In the present study, we conducted a survey on families with multiple-birth children and thereby elucidated childcare needs from pregnancy to infancy, as well as the contents and timing of support. In addition, we conducted and elucidated the effectiveness of peer support for the parents as a support method. As for methods of support for twin children centered on the parents, we developed a systematic method based on networks with specialists in the community.

研究分野：看護学

科研費の分科・細目：生涯発達看護学

キーワード：多胎家庭 育児支援 地域ネットワーク 当事者主体 虐待防止 育児ニーズ ピアサポート

1. 研究開始当初の背景

多胎家庭の現状

近年の不妊治療の普及とともに多胎児の出産率は年々上昇し、多胎の98%を占める双子は1950～60年代には出産1000に対して6.1～6.4程度であったが、1980年前後より年々上昇を続け2006年では10.8となった(今泉1993, Imaizumi 1994, 厚生労働省2007)。多胎妊娠はハイリスク妊娠として位置付けられ、妊娠中の異常の発生率も単胎の妊娠に比べると高く、妊娠中毒症は20～30%、早産は約40%におこるといわれている(日産婦学会1995、高木1991)。また双生児の周産期死亡率も高率であり、2000～2003年の多胎の早期新生児死亡率は出生1000に対し7.27で、単胎の9.18倍であり(末原2007)。周産期を通して包括的で系統だった管理が必要である。

また多胎児は、以前より児童虐待のハイリスク要因と考えられており(Tanimura1990)。2005年の「厚生労働省児童虐待など要保護事例の検証に関する専門委員会」の報告においても、虐待の背景となる子ども側の要因として、未熟児や障害児とともに多胎があがっている。今年に入っても相次いで双子の虐待死が報道されている。

多胎児家庭の特に母親の心身の健康や育児ストレスについては、近年国内外でも調査研究がすすみ、多胎児の親のニーズが報告されてきている。双生児の母親は単胎児の母親に比べてうつ傾向が高いと言われており(Torpe 1991 服部2007)、特に乳児期では、授乳や離乳食、排泄、清潔の世話など倍の育児量におわれ、1歳を過ぎても疲労は蓄積していくことが明らかにされている(服部2007、2002、Beck 2002)。また低出生体重児や障害をもつ多胎児も増加してきており、障害児など複雑な育児上のニーズをもつ多胎児の家族が増加している(末原2007、浅野2008)。少子化が進み育児困難が課題になる現在、子どもを産み育てていく家族への継続的かつきめ細やかな育児支援は、急増する児童虐待の予防の観点からも、重要な母子保健上の課題となっている。特に多胎や障害児など個別のニーズをもつ家族への援助は社会的緊急性が著しく高いにもかかわらず、多胎児においては妊娠期からの満足のいくケアは十分実践されていない(渡辺2009、大木2007)。また看護職においても多胎児への看護について知識不足が報告されている。

多胎育児の支援の現状と課題

多胎児の育児支援については、1990年代後半より各地に当事者のセルフヘルプグループとして多胎育児サークルができ、行政でも多胎児のつどいなど集団での支援活動を行ってきた。また多胎に限らず育児困難の家庭には家庭訪問などの個別の対応が行われてきた。しかし、多胎育児を妊娠期から育児期までの課題を把握し、問題解決に向けた地域や医療施設が連携し組織的な取り組みを展

開するまでには至っていない。多胎家庭から見ると、妊娠期から不安を抱え、心身の多大な負担を負って出産し、育児に至る過程は継続しており、さらに育児期においても乳児期から幼児期と育児上の課題は変化していく。妊娠期から育児期まで、切れ目のない包括的な支援が必要であり、それには当事者と看護職を始めとする専門職の協働を基盤としたネットワークを形成し、組織的な支援を展開する必要がある。

2. 研究の目的

最近の子育て支援事業においては、わが国でも虐待予防の観点から乳児家庭全戸訪問事業や養育支援訪問事業など訪問型の支援が重視されてきている。また英国を発祥とする「ホームスタート」という事業は30年以上続いている親が親を支援する(ピアサポート)家庭訪問型の支援で、その有効性は認められており(西郷2007、2006)。孤立の予防と協働がキーワードになっている。

育児支援においても当事者同士が結びつく地域ケアネットワークの形成が多胎児家庭へのポピュレーションアプローチの視点から重要な意味をもつ(大木2008)。ポピュレーションアプローチでは、多胎児家庭全体を広く把握し、それぞれの家庭に個別または集団を対象に、予防的な支援を実施すると多胎児家庭全体の育児困難の状況を改善することができる。今後は多胎児支援においてもケアネットワークを活かした予防的な取り組みが不可欠であると考えられる。

多胎家庭の支援に必要な要素の明確化。

支援プログラム作成のために、支援のニーズとともに、看護介入時期のリスクポイント、不妊治療を受けた対象へのケアニーズ、また父親の現状と支援の要素を明らかにする。

ピアサポート実施における多胎家庭への有効性の検証

ピアサポートを実施し、ピアサポートを受けた対象の反応や評価、またサポートした当事者の反応などについてデータ化し、看護の視点から実証的な検証を行う。

当事者と専門職のパートナーシップを基盤とした支援システムのモデル提示

地域における多胎支援のネットワークを構築し、看護職の質の向上も視野に入れた支援システムが提示できるようにする。

3. 研究の方法

研究1 ニーズ把握のための質問紙調査

A県の5つの多胎サークルを通じて、サークル代表者に多胎育児のニーズを明らかにする調査をサークル会員について実施した。質問紙は、それぞれのサークルの会員数をサークル代表者に聞き、必要数を準備し、代表者に郵送した。対象者は4歳未満の双子をもつ会員とした。サークル会員には質問紙の返送をもって了解を得ることとした。配布数は全部で50であった。

研究2 ピアサポートの実施

ピアサポートは、A 県の多胎育児支援ネットワークでこれまで取り組んできた、ピアサポートの成果から、養成講座のプログラムを作成し、ネットワークで人材を養成している。今回のピアサポートに関しても、養成講座でピアサポートについて学んだ多胎児の親が、訪問に出向いた。ピアサポートは、訪問のみならず、行政での子育て支援の場に出向いたり、周産期センターで入院中の多胎の母親に対して行っている。

今回は、30 家庭を訪問した。訪問はピアサポーター2 人で行うが、1 人はコーディネーターの資格をもつものである。コーディネーターもネットワークで養成している。

研究3 多胎育児支援のためのガイドブックの作製

多胎家庭のピアサポートや、多胎家庭対象の妊婦教室で用いるためのガイドブックの作製を行った。これまで保健指導で用いてきたテキストブックを再度検討し、イラストや表現を工夫し、さらに使いやすいものになるよう、共同研究者の周産期センター助産師とともに新たなガイドブックを作成した。

4. 研究成果

研究1 ニーズ把握のための質問紙調査

対象の背景

回答数は 23 であった。母親の年齢は平均 32.7 歳、初産婦は 15 名 (65%)、多胎児はすべて双子であった。双子の平均年齢は、21 か月 (7~44 か月)、平均在胎週数 37 週 1 日 (31 週 5 日~37 週 5 日) であった。双子の平均体重は、児 2400g、児 2258g であった。

妊娠中の異常があったものは 19 名、主な異常は切迫早産 14 名、切迫流産 7 名、貧血 7 名、妊娠高血圧症 2 名、妊娠糖尿病 1 名であった。出産前の管理入院は 19 名が経験していた。入院期間は平均 5.4 週間であった。里帰りは、16 名が行っていた。

妊娠中の状況について

・妊娠経過について (人)

とても不安だった	6
不安だった	13
あまり不安はなかった	3
不安はなかった	1
計	23

・胎児の健康について (人)

とても不安だった	8
不安だった	11
あまり不安はなかった	4
不安はなかった	0
計	23

・双子妊娠に関する医療施設からの情報について (人)

十分得られた	6
ある程度得られた	14
あまり得られなかった	3
計	23

・双子妊娠に関する地域から情報について (人)

十分得られた	4
ある程度得られた	6
あまり得られなかった	10
ほとんど得られなかった	3
計	23

・妊娠中の不快症状はトラブルについて「あった」ものは 17 名であった。主な症状として、つわり、腰痛、恥骨部痛、めまい、疲労、静脈瘤、おなかの張り、重さ、圧迫感などであった。

・双子妊娠や育児の相談者や支援者について「いた」は 18 名、「いなかった」は 5 名であった。相談者は、双子サークル 6 名、実母 3 名、義母 2 名、友達 3 名、双子先輩ママ 2 名であった。

・妊娠中の日常生活の過ごし方について「よく理解していた」は、3 名、「まあ理解していた」は 19 名、「あまり理解していなかった」は 1 名であった。

・双子妊娠の夫以外の家族の理解について「十分理解してくれた」は 7 名、「まあ理解してくれた」は 16 名であった。

・妊娠中の医療機関の受診について困ったことがあったのは 6 名であった。内容は、「病院が遠方であった」4 名であった。

・上に子どもがいる母親 (8 名) のうち上の子の対応に困ったことがあるものは、7 名であった。内容は、子どもの世話が大変や赤ちゃん返りであった。

・妊娠中に双子育児のイメージができたか、という問いに対しては、「ある程度できた」が 9 名、「あまりできなかった」が 12 名、「全くできなかった」が 2 名であった。

・双子の出産での入院中に大変だったことは、「母乳育児」が 12 名、「出産後のこころの不安定」9 名、「上の子の心配」7 名、「赤ちゃんの入院」が 6 名であった。

出産後の状況について

・出産後 1 か月までの身体の不調には、「睡眠不足」14 名、「疲労」13 名、「帝王切開後の痛み」8 名、「腰痛」6 名、「筋力低下」6 名、「イライラ」6 名、「むくみ」4 名、「貧血」2 名であった。その他高血圧、帝王切開後の吐き気、痔の悪化、集中力低下があった。

・母親の睡眠時間

生後 1 か月	3.3 時間
2 ~ 5 か月	4.9 時間
6 ~ 12 か月	5.6 時間

・まとまった睡眠がとれるようになった時期は、6 か月が最も多く、5 名、次は 10 か月で 3 名、5 か月で 3 名であった。

・出産後 1 歳くらいまでの母の体調について、大変だったのは、「疲労」14 名、「イライラ」14 名、「腰痛」11 名、「筋力低下」6 名、「集中力低下」3 名「関節痛」2 名、その他では頭痛、突発性難聴、母乳トラブル、腱鞘炎であった。

・出産後体調不良はいつまで続いたかという問いには、現在まで(今も続いている)が最も多く、7 名であった。3~4 か月頃までが 4 名、6~7 か月ごろまでが 4 名、1 歳ごろまでは、1 名であった。現在まで不調が続くと答えた母親の平均年齢は、35.3 歳であった。

育児での大変だったこととその時期について

双子育児について大変だった時期を回答してもらった。0~3 か月までを初期、4~7 か月までを中期、8~12 か月までを後期、1 歳以降を現在までとして、大変だった時期をすべて答えてもらった。

集計は「とても大変だった」「大変だった」「あまり大変ではなかった」「大変ではなかった」の 4 件法の回答について、「とても大変だった」と「大変だった」をまとめ大変と感じた時期について集計した。

・母乳育児

とても大変だった	9
大変だった	9
あまり大変ではなかった	5
計	23

大変だった時期

初期 17 中期 4

・授乳

とても大変だった	8
大変だった	10
あまり大変ではなかった	5
計	23

大変だった時期

初期 12 中期 7

・離乳食を与えること

とても大変だった	6
大変だった	10
あまり大変ではなかった	6
計	22

大変だった時期

初期 4 中期 7 後期 10
現在まで 1

・生活リズムを整えること

とても大変だった	4
大変だった	4
あまり大変ではなかった	14
計	22

大変だった時期

初期 3 中期 2 後期 0
現在まで 4

・夜泣き

とても大変だった	8
大変だった	7
あまり大変ではなかった	4
大変ではなかった	4
計	23

大変だった時期

初期 9 中期 7 後期 5
現在まで 4

・入浴

とても大変だった	6
大変だった	8
あまり大変ではなかった	6
大変ではなかった	3
計	23

大変だった時期

初期 6 中期 10 後期 5
現在まで 3

・健診や予防接種の受診

とても大変だった	4
大変だった	7
あまり大変ではなかった	8
大変ではなかった	4
計	23

大変だった時期

初期 3 中期 5 後期 4
現在まで 4

・母親一人で二人の子どもをみる心細さ・不安について

とても大変だった	10
大変だった	10
あまり大変ではなかった	3
計	23

大変だった時期

初期 12 中期 12 後期 7
現在まで 7

・子どもがふたりいることでの「平等」への
気づきについて

とても大変だった	2
大変だった	5
あまり大変ではなかった	14
大変ではなかった	2
計	23

大変だった時期

初期	2	中期	2	後期	1
現在まで	5				

・ふたりの発育・発達の違いに悩んだ

とてもそう思った	2
そう思った	3
あまり思わなかった	10
思わなかった	7
計	22

思った時期

初期	1	中期	2	後期	1
現在まで	3				

・子どもが可愛いと思えない

とてもそう思った	2
そう思った	4
あまり思わなかった	5
思わなかった	12
計	23

思った時期

初期	3	中期	3	後期	3
現在まで	0				

・低出生体重児で産まれたことによる不安

とてもそう思った	3
そう思った	3
あまり思わなかった	6
思わなかった	6
計	18

思った時期

初期	4	中期	0	後期	0
現在まで	1				

・双子育児の相談相手がいない

とてもそう思った	2
そう思った	7
あまり思わなかった	5
思わなかった	9
計	23

思った時期

初期	6	中期	4	後期	3
現在まで	2				

・話し相手や友だちがいない

とてもそう思った	0
----------	---

そう思った	11
あまり思わなかった	4
思わなかった	7
計	22

思った時期

初期	5	中期	4	後期	2
現在まで	3				

・家に引きこもりがちで気分が落ち込んだ

とてもそう思った	6
そう思った	6
あまり思わなかった	7
思わなかった	3
計	22

思った時期

初期	9	中期	6	後期	3
現在まで	2				

・地域の双子育児の情報をどう入手してよいか
わからない

とてもそう思った	2
そう思った	7
あまり思わなかった	8
思わなかった	6
計	23

思った時期

初期	3	中期	1	後期	0
現在まで	3				

・夫の育児への協力や理解が不十分

とてもそう思った	3
そう思った	3
あまり思わなかった	10
思わなかった	7
計	22

思った時期

初期	1	中期	2	後期	2
現在まで	2				

・夫以外の家族の育児への理解や協力が不十分

とてもそう思った	0
そう思った	3
あまり思わなかった	11
思わなかった	8
計	22

思った時期

初期	1	中期	1	後期	1
現在まで	0				

・地域の人々の双子育児への理解が不十分

とてもそう思った	1
そう思った	7
あまり思わなかった	10
思わなかった	5

思った時期
 初期 2 中期 2 後期 1
 現在まで 3
 ・経済的な心配

とても心配	6
心配	8
あまり心配はない	5
心配はない	4

多胎家庭の育児支援ニーズ

これらの結果から多胎家庭の育児支援ニーズを図式化して表わした。

時期は妊娠中、出産後、0~3 か月、4~7 か月、8~12 か月とし、「母の身体」「母の心理」「母の育児に関する問題」「家族の課題」「地域との関わり」に分け、それぞれの育児の課題を記載した。

研究2 ピアサポート

ピアサポートで家庭訪問を実施したのは、30件であった。妊娠中が11件、0~5か月13件、6~11か月0件、1~2歳以上2件であった。ピアサポートを受けるまでの手順については、スムーズに手続きができたがほとんどであり、ピアサポーターの印象についても良かったと答えている。利用者の評価では、「私のこころが軽くなるアドバイスをして下さった」「2人組というところが良い。自分の似た環境の方が来てくれて、幅広くお話が聞けた」「安心できた」「今回妊娠中で実際に育児が始まると聞きたいことが出てくると思うので、是非また利用したい」「同じような家族構成の方に訪問していただいたので、共感できる部分が多く、有難かったです」「同じ思いをもちながら育てられた方々の経験談はとても貴重でした」などの意見がみられた。

研究3 多胎育児支援のためのガイドブックの作製

多胎家庭のピアサポートや、多胎家庭対象の妊婦教室で用いるためのガイドブックの作製を行った。ガイドブックは「ふたごナビ」という名称をつけて、日本多胎支援協会のホームページに公開した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

1. 服部律子：妊娠と出産に関する諸問題、多胎育児の支援とポイント、チャイルドヘルス、13(10)、9-11、2010
2. 名和文香、服部律子、布原佳奈、武田順子：妊娠期に行政・医療機関・多胎児サークルが協働して行う多胎児教室の検討、岐阜県立看護大学紀要、第13巻1号；125-135、2013.

〔学会発表〕(計3件)

1. 服部律子、川鱈市郎、安藤智子、糸井川誠子他：行政・医療との協働による地域に根差した多胎支援～ぎふの報告その1、第26回双生児研究学会学術講演会、2012.1.28
2. 志村恵、糸井川誠子、大木秀一、服部律子他：「虐待防止のための連携型多胎支援事業」について、第26回双生児研究学会学術講演会、2012.1.28
3. 服部律子、佐藤喜美子、平石皆子、大高恵美、大木秀一：全国の周産期医療施設における妊娠中からの多胎支援の現状、第53回日本母性衛生学会学術集会 53(3)、172、2012.

〔その他〕

ホームページ等
 一般社団法人日本多胎支援協会ホームページ